

## 温泉発見と温泉神社の創建

伝えるところに依ると、推古・舒明天皇の頃（601～641）広大な那須野ヶ原の一隅にある茗荷沢（現那須町字茗荷沢）の住人三郎は、春秋に耕し、冬は狩りを生業として逞しく生きていた。この三郎は年々里に下りて来る全身白毛の大鹿を、「今年こそは射止めん」と、山麓深く分け入って探し求めた。幸いにも大鹿を見つけて矢疵（やきず）を負わせたが、必死の鹿は霧深い谷にその姿を隠した。

三郎は迷わず血痕と足跡を辿り、谷の奥深くこれを追い求めた。暫くして、霧の晴れた一瞬、谷川の深みに恰も疵を癒すごとく身を沈めている大鹿を見つけ、二の矢・三の矢を放つてこれを倒した。獲物に駆け寄つてみると、そこには硫黄の香の強い温泉が、こんこんと沸き出でているではないか。三郎の温泉発見の知らせはたちまち知れ渡り、温浴の効果の絶大も評判となつて、功績と感謝の言葉が高まつたのである。その声に三郎は、「白鹿は神の使

いであり、温泉の発見は神の恵みに他ならない。」と、日頃信仰していた有史以前に、知恵と勇気と仁徳で國土を拓き民を安んじて、出雲の大社に斎祀おおやしろいっさいられて「**大国主命**」と、その偉業を扶けた産業振興の神「**少彦名命**」を勧請して、温泉神社を創建したのである。後にこの神社は、貞觀五年（863）に位階を授けられ、延喜五年（906）には全国有数の式内社（正倉院台帳記載社）として、その名を知られたのである。

なお、この靈泉が不治の病を癒すと「**風評**」は、早くも奈良の都に聞こえ、天平十年（783）には貴族小野朝臣あそんが、十二名の徒者と共に来湯したことが、正史に残されている。

温泉を開発し神を勧請した三郎は、後に功績を讃えられて「狩野三郎行広」と諡おくりなされ、温泉を見立てた（発見した）事績により、「見立神社」祭神として祀られた。なお、深山幽谷に入り「人の見ざる処を見た」によつて「人見氏」を称したと伝えられ、その子孫は綱の如く長く仕えると「綱」を名乗つて、代々両神社に奉

## 温泉神社と那須氏

持統天皇の時代（645～697）那須国を支配したのは国造「那須直韋堤」である。その子孫は土豪となり、平安時代に至つて那須權守貞信が威勢を揮つた。（なすごんのかみさだのぶ）その後複雑な経過を経ながらも、那須氏の血統を伝えて資隆に至つたと言う。

この資隆の時代は、正に源・平が霸を競つた最高の時代であつた。

資隆には太郎光隆を初めとして十一人の子があつたが、折から平氏の強い要請によつて、九郎朝隆までを平氏の軍に参陣させていた。残る十郎為隆・余一宗隆は、兄頼朝の騎下への参陣を急ぐ義経に請われて、源氏に属したのである。その余一に源平合戦の屋島の戦いにおいて、晴れの舞台が回つて來た。それは、「平家の盛衰を占つた、小舟の竿先に掲げた桧扇を射よ。」との義経の命令である。余一は波にゆられて上下する扇の的を前に、射はずせば死を覺悟して神仏に祈つた。特に故郷一の宮に「那須温泉大明神、この矢射させてたばせ給え。」と、矢は見事に的中し、平家の衰亡を早めたのである。この功により余一は、弓の日本一の「一」を与えられ、余一を「与一」と改め、那須地方に八万石を始め各地に合計十八万石を与えられた。

与一の功績により平家に味方した兄達も許されて、共に故郷那須に凱旋した与一は、那須温泉神社の靈験あらたかな神恩に感謝し、社殿を改築すると共に源氏の守護神である「八幡神（応仁天

皇）」を相殿（合わせ祀ること）としたのである。その折りに奉納したと伝えられる「桧扇ひおうぎ・鏑かぶらや・征矢そや」が社倉に納められている。那須家総領となつた与一は、十人兄達を領地内に分家独立させて、一門の固めとした。森田・福原・佐久山・伊王野氏などがそれである。現在那須地方には八十一の温泉神社が数えられる。これは一族がそれぞれの領地に分祇ぶんししたものである。如何に那須温泉神社への信仰が篤かつたかが推測される。

与一は、病を得て二十四歳の若さでこの世を去り、歴史にその名を止めるのみとなつたが、子孫は鎌倉・室町時代、そして戦国動乱の時代まで、北関東の雄として栄えていた。だが、天正十八年七月（1590）豊臣・徳川連合軍によつて滅んだ小田原北条氏と運命を共にして、衰亡に向かつたのである。

現在神社には、後北条氏と誼ともみを通じたため、秀吉によつて八万石から五千石に格下げされた。この不運な那須資晴すけはる奉納の「鏑矢筥かぶらやばこ」が残されている。その奉納の時は慶長十二年（1607）の夏であり、江戸幕府成立直後のことであった。

表銘には与一の偉業を讃え、温泉神社の神徳に感謝の言葉を述べると共に、「官禄倍増・家門繁栄・武運長久・攘災安寧」の衰運挽回の必死な祈願の言葉が記載されていて、温泉神社信仰を貫いた那須氏の面目を窺い知ることができるのである。だが、那須氏は時代の流れに乗ることが出来ず、衰亡の一途を辿ることになつた。